

Free as a Bird 『Travel- maker』

弦月

何の変哲もない、日曜の昼下がりだった。『彼』があたしの家にやってきたのは。朝、目が覚めたら一人、なんていう生活がようやく日常になりかけた頃。あの迷惑な男はそっと何の前触れもなく、玄関のチャイムを鳴らして現われたわけで――。

「ど～も、こんにちはっ」

若い男の明るい挨拶と笑顔。出てからあたしは激しく後悔した。普段は覗き窓から訪問者の姿を確認してからでないと玄関のドアは開けないことにしているのに。

「――っ結構ですっ！！」

今からでも遅くない！そう思い、あたしは半分開けかけたドアを急いでまた閉じる。扉一枚隔てたその向こう側で、その男は『ええっ！？ちょっと待ってくださいよー！？』……などと、間の抜けた声をあげている。

「ごめんなさい、セールスとか、そういうのはお断りなんでっ！」

「いえいえ、そーゆーのじゃないんですよ」

「じゃ、どーゆーのなんですか？」

「そうですねえ……」

しばらく、沈黙。言い訳でも考えているのか。

「あ、ハガキが届いてますよー。読んじゃおうかなー？」

「なっ…ちょ、ちょっと何勝手に！！」

「――なーんて。冗談でしたー」

慌ててドアを開けかけると、彼は笑って両手をひらひらと目の前にかざした。むかついた勢いそのままに、即座に再びあたしはドアを閉めようとする。しかし、その一瞬の間に彼は空いたわずかな隙間に履き古したぼろぼろのスニーカーを挟み込んだ。

……今時、セールスマンだってこんな強引な方法は取らないだろうに。

「あの、セールスとかはお断りなんですけど？」

「いえいえ、さっきも言いましたけど、そういうのとは違いますから」

この時初めて、あたしは目の前の男をまじまじと観察した。言われてみれば。確かに、セールスマンならまだ残暑厳しいこの季節とはいえスーツ姿じゃなきゃ様にならない。それがどうしてこの男はTシャツにジーパン姿だ。そして背中に大きなリュックサックを背負っている。長身の割には細身でひよろ長いから山男という言葉はそぐわないかもしれないが、それでも彼の格好はそれそのまま富士山にでも登れそうな重装備、だった。

「最初に言っておきますが、別に怪しい人間じゃないんで。安心してください」

……わざわざそう言うあたりが余計に怪しいんですけど？

「実はひとつ、お願いがありまして」

「……なんですか？」

迷った末に、あたしはそう聞いた。聞いてしまった。あとからしまったと思ったけれど遅かった。彼はピースサインを作って、にこっと笑う。

「二晩、こちらのお宅に泊めていただけませんか？」

十秒ほど、沈黙。悩んだ末に、あたしはこう返した。

「……そこのでっかい道路をずっと南に十分ほど行ってください」

予想と反した返答に、男は首を傾げて不思議そうな表情を。

「何ですか？ホテルかなんかでもあるんですか？」

「病院があります。確か、精神科もあったはずですから」

「何ですか、他人を気遣いかなんかみたいに」

「おかしいですよ、充分！見ず知らずの人間の家をいきなり訪ねてきて『泊めてくれ』だなんて。しかも私、独り暮らしですよ？これでも嫁入り前の娘ですよ？あなたみたいな訳の分からない男性を家に上げて、あまつさえ泊めるだなんて——」

「ああ、そうですね。そういう心配は無用ですよ」

何をしてこいつは『心配が無用だ』と言っているのか。徐々にいかつくなっていくあたしの表情も全く意に介することなく、彼は終始その笑顔を崩さずに言葉が続ける。

「寝場所なんて、どこでもいいんですから。それこそ台所でも玄関でも。それでも信用できないというならロープで両手両足縛るなり、好きにしてくださいませんか？」

「だからそういう問題じゃないですよ。見知らぬ男性と一晩同じ屋根の下で眠るっていうこと自体、有り得ないでしょ？寝る場所がどこでもいいっていうんならそれこそ公園か駅にでも行って過ごせばいいじゃないですか！」

「それじゃ、ダメなんですよねぇ」

「どうして!？」

ますますヒートアップしていくあたしとは反対に、彼はその嫌らしい程に落ち着いたペースを乱すことはない。けれど、それが逆にこちらの神経を逆なでするといふものだ。

「まあこちらにも、いろいろと事情というものがあってですね」

「とにかく、結構ですからお引取りくださいっ！」

「——まあまあ、もちろんただでは言いませんよ」

「もう、しつこい！お金なんていないから！だから早く帰ってよっ！！」

「人の話は最後まで聞くものですよ。誰が、お金を払うなんていいました？」

「えっ？違うの……？」

「残念ながら、各地を渡り歩いていることもあって貧乏ですからねー。礼金とか宿泊代とかは払えないんですけど。でも、その代わり」

「その代わり……？」

聞いちゃダメだ聞いちゃダメ！あたしは自分に言い聞かせた。頭の奥のどこか片隅で、もう一人の自分が警鐘を鳴らす。それを聞いたら多分抜き差しならない事態になる、と。

「あなたのお願い事を、何でもいいので何かひとつ叶えさせてください」

「……何、それ……？」

呆れ果てて、それだけしか言葉にならなかった。

「だから、残念ながらお金はないですがその代わり宿を提供していただいた方の願いを叶える、というサービス……いえ、ギブアンドテイクですよ」

「そんなこと、本当に信じられると思ってるの？あんたがそれを守るっていう保障は何処にあるのよ？」

「いやー、保証書や誓約書を書いてもいいんですけどね。でも、僕は絶対に、百パーセント、どんなことでもあなたの願いを実現させていただきます」

「絶対に、百パーセント、どんなことでも？」

「はい、絶対に、百パーセント、どんなことでも」

確認するように、一言一句、問い返したあたしに。彼はゆっくりと、もう一度噛み締めるように、そう言った。言い切った。言い切りやがった。

「それでも信じてもらえないようなら、その時は警察に連絡するなり詐欺で訴えるなり、好きなようにしてください。僕は逃げも隠れもしませんから」

そう言って、自信満々に笑う顔。……ずるい。明日は誰にも分からない。未来は誰にも変えられない。それなのに、何で。何でそんな無責任なこと、言えるのよ……！？

「悪いけど私、何もお願い事なんてないから。願いとか理想とか、考えたり描いたりするだけ無駄だから。だから、私には何もお願い事なんてない。だって、全部——」

「——無駄だから？やる前からそうやって決め付けちゃうんですか？」

「決め付けたくもなるわよ、こっちの気も知らないで！ごめんなさい、そういうわけでさよなら！もう帰ってっ！！」

「本当に、一人で大丈夫ですか？大丈夫じゃないような顔してますけど？」

「余計なお世話っ！！」

「じゃあせめて、話だけでも聞かせてくださいよ。一体、何があったのか。それくらいならいいでしょ？」

そう言って、男は背負っていたリュックをよいしょ、と玄関に下ろすと、その上に座り込んだ。はっと気が付いたとき、玄関のドアは完全に閉まっていた。彼は完全に家の中に入り込んでしまっていた。そしてそれと同時にあたしの心の扉にも、ずかずかと入り込んできてしまっていた。——後悔するには、遅すぎた。

「いやー、すみませんねえ。お茶までご馳走になっちゃってー」

「別に。あんたを喜ばせようと思ってやってるわけじゃないから、誤解しないで」

……今、あたしは台所のテーブルで男と向かい合ってお茶を飲んでた。我ながら、有り得ない状況だと思った。今日いきなり、それも会ってたかだか十数分の面識もないしかも突然家に泊めるなんて言い出す頭のおかしい男を家の中にあげて、しかもご丁寧に、お茶まで振舞っているなんて。だけどまあ玄関で話すのも部屋で話すのも結局は同じだから。台所ならいざという時には包丁を取り出すことも出来る。この男を完全に信用したわけではないけれど、とりあえずさしあたって話をするのに問題はないと判断した。

「あなた、名前は？」

そういえば、名前すら聞いてない——今さらながら気付いて、あたしは問いかける。

「そうですねえ。名乗るほどの名はありませんが、古鳥 閑（ふるとり・のどか）、と呼んでください」

「……あんた、それ絶対偽名でしょ？」

「さあ、どうでしょう？」

そうやって何食わぬ笑顔で流されたら、それ以上を突き詰めて追求する気にもならない。まあ、こいつの名前が本名でも偽名でもあたしにはそれほど関係のないことだ。

「あたしは池村 名月（いけむら・なつき）。ナツキでいいわ」

「分かりました、ナツキさん。それで……あの、一体、何があったのですか？」

閑は慎重に言葉を選んで、尋ねてくる。あたしはしばらく悩んで、その口火を切った。

「この家、なんで今あたしが一人で住んでるか分かる？」

それは考えた末、話のきっかけにもっとも相応しいと思われる台詞だった。今現在、あたしが置かれている状況を説明するならまずはそこから、だ。

しばらく考えるような素振を見せていた閑だったが、それに答えるいつの間にかその表情が、今までの人を食ったような笑顔から真面目なものへと変化していた。

「同居人が何らかの理由でいなくなった、ってことですか？」

彼の指摘は的確に的を射ていた。続けて、あたしは『何でそう思うの？』と聞き返す。

「まず、この家の広さは独り暮らし用じゃ有り得ません。あなたのような若い女性が独りで住まわれるのには向いてない。この家は何人かで住むことを前提として造られた、あるいは買われた物であるはずですよ」

「……それで？」

「あなたの先程の発言、そして人柄から、その同居人が彼氏とか同棲相手、ということはずないでしょうね。友人と住んでるといってもなさそう。友人がいなくなれば、あなたもこの家から出て行くのが普通だろうから。だから、あなたがこの家で一緒に住んでいたのは家族だし、この家も元々あなたの実家であるはず……」

「へえ、名推理じゃない」

「となると問題なのは、あなたを置いてその家族が一体何処へ行ってしまわれたのか、ですね。もし事情があって家を離れなければならないのなら、娘も一緒に連れて行く・ついて行くというのが普通でしょうから。これ以上は立ち入った事柄になると思われますが……僕の考えが正しければ——」

そこで一旦、台詞を切る。どうやら、慎重に言葉を選んでいるらしかった。

「それはあなたでさえついていけないような場所、ですね？」

どこまでも婉曲な、微妙な表現の仕方だった。もしかしたら——ううん、もしかしなくてもこい

つはもうすでに、結論、に辿り着いているんだろう。

「そうよ。あたしもついていけないような場所。お母さんもお父さんも、あたしの手の届かないところに行っちゃった。——天国よ。あたしの両親ね、二人とも死んでるの」

我ながら、衝撃的な告白だとは思ふ。けれど目の前の男はさほど驚いた様子も見せず小さく『ご愁傷様です』とだけ呟いた。やはり、すでにこのことは予想していたらしい。

「でも、言うほどそんなに大変じゃないのよ。住む場所には困らないし、貯金と保険金で何とかあたしが成人するまではお金の心配はしなくてすみそうだし。独り暮らしは大変だけど、慣れれば何とでもなる。問題は——」

「——問題は？」

閑が鸚鵡返しに問い返す。気が付くと何故かこうやって、こいつの思い通りに喋らされている。腹立たしいけど、もう少しだけ乗ってやることにする。

「母親はあたしの小さい頃に病気で死んでる。こっちは置いとくわ。問題は父親の方」

「そういう言い方をされるという事は、自然死ではないのですよね？」

実に気の遣った言い回しだった。『自然死ではない』。それはつまり、病死ではないということ。残るは、事故か、自殺か、あるいは——。

「そうよ。一体、どれ、だと思う？」

「.....僕には、どれ、だとはっきり断言して申し上げることは出来ません。ですがあえて推理するとするなら.....まずあなたは先程、お父様の保険金と仰いましたね？自殺ならば保険金は下りません。よってあとは二択です」

「なるほど」

「そして、事故として解決しているのならば、わざわざ今さら掘り返す必要もないでしょう。僕が思うに、あなたは過ぎたことをいつまでも蒸し返すような性格の方には思えない。ですから結論として考えられるのは、第三の可能性ではないかと思ひます。あくまで可能性の話ですけどね」

素直にあたしは、驚いた。あたしと会ってからの少ない一挙一動でそこまで推理してしまうなんて、驚嘆に値する。

「.....驚いた。まったく、その通りよ。あたしの父親は半年前に死んだ。殺されたんだ」

「殺人事件って訳ですね。そしてあなたの様子から察するに、恐らくその犯人はまだ.....」

あたしは力無く、頷いた。

「そう。まだ捕まってない」

「詳しい状況を、お聞きしてもよろしいですか？」

「今さら、何言ってるのよ。ここまで人に言わせといて。それにどうせあたしが『嫌』って言っても何とかして聞きだすつもりでいるんでしょ？」

「いやはや、理解が早くて助かります」

さすがにここまで来たら、あたしも隠すつもりはなかった。

「あたしの父さんね、絵を描いてたのよ」

「へえ、画家ですか。それはすごいですね」

「そう。あたしは全然疎いんだけど名前はそこそこ売れてたみたいよ。池村巡（いけむら・めぐる）って知ってる？」

「ええ。現代洋画の大家ではないですか」

閑の表情に、素直に驚きの色が浮かぶ。

「事件が起きたのは、半年前。現場は少し離れた所にある、父さんの事務所兼アトリエ。父さん

はその日も独りで仕事をしていた。そして翌朝、刺殺体となって見つかった」
つらつらと話し出したあたしに、彼は先程とはまた違った種類の表情で驚きを表した。

「……驚いてる？あたしがあまりにも淡々としすぎてるから」

「ええ、まあ……」

「あたしね、ずっと父さんのことが大嫌いだったの。父一人子一人の父子家庭だったんだけど、父さんはずっと仕事一筋であたしのことなんか全然顧みなかった。よくある仕事人間ってやつ。ケンカも絶えなかったな」

まあ、どこにでもよくある種類の話だ。親と上手くいかない、なんていうのは。

「でもね。あんな父親でもいなくなるとやっぱり寂しいんだ。ましてやそれが殺人、なんていう非日常的な死に方されたらなおさら、ね」

そしてまた、辺りは沈黙した。切り裂いたのは、彼の力強い声だった。

「——あなたは、その犯人を捕まえる事を望みますか？」

「どういう意味？」

質問の意味が分からず、あたしは問いかけて正面から彼の顔を捉えた。

「ナツキさん、あなたはお父上を殺害したその犯人を捕まえたいと思いますか？」

それは今まで見てきた中で一番、真剣な閑の表情だった。その真っ直ぐな瞳は、いい加減な返答をする事を許さないほど強い光を宿す。犯人を捕まえたいかどうかだって？そんなの、改めて聞くまでもない。コイツは試しているんだ。あたしに、どこまでの『覚悟』があるのか。……上等じゃない！

「当たり前よ。そんなのこのまま、謎にしておいていいわけがないもの！」

「——分かりました。それなら僕も、その事件を解決するために微力ではありますが手助けをさせていただきますましょう」

言って、彼は表情を崩した。優しい、魅力的な笑顔だった。思わず一瞬見とれて、目が離せなくなってしまうくらいに。だから……多分きつととっさにこんな可愛げのない言葉しか出てこなかったのは、多分照れ隠しのはずで。

「あああ、あんたに言われるまでもないわよ！第一、『手助けさせてさせていただく』だなんて偉そうに、あんた一体何様のつもり！？」

あたしの言葉に、閑は苦笑混じりに返した。

「はは、そうですね、確かに言い方が悪かったかもしれないですね。それではもし、あなたさえ良ければ手助けをさせてはいただけないでしょうか？」

「し、仕方ないわね、そこまで言うならいいわよっ！」

「——はい、ありがとうございます」

あたしのそんな傲岸不遜な言葉にも、彼は余裕で笑ってそう返した。もう、何だって意味もなくそんなににこにここと笑ってられるのよっ！？すっごく憎たらしいっ！すっかりこいつのペースに乗せられてるし！！あたしが一人でむかむかとやきもきしていたその時。

不意に、閑が困ったような顔をして、ぼつりと小さく声にした。

「お腹、空きましたねえ。そろそろ、夕食の時間ですかね？」

「……何よ。あたし、何も用意しないわよ。あんた、最初に言ったわよね。『二日この家に泊めてほしい・それが自分の望みだ』って。別にいちいち食事を用意する、なんて約束してないわよね？」

「仕方ないですね。それならせめて、台所をお借りしてもよろしいですか？」

「まあ、それくらいなら」

閑は立ち上がって、冷蔵庫に手をかける。そしてそのまま十数秒固まった。

「……………あの。見事なまでに空、なんですけど」

「うん、そうだね」

「参考までにお尋ねしますが、ナツキさんは食事をどうなさるつもりだったのですか？」

「出前か外食。ちなみに前者だとカツ丼か天丼で、後者だとハンバーガーかラーメンの予定だった」

「……偏ってますねえ」

ため息混じりに呟く声。思わずあたしは叫んでいた。

「悪かったわね、どうせあたしは性格偏りまくってますよっ！」

「そ、そうじゃなくて！あなたの性格がなんて滅相もない！栄養が、ですよ」

「え？あ……ああ、栄養偏りすぎ、って言いたかったのね」

いけないいけない、また早とちりをしてしまった。

「仕方ないじゃない。あ！念のために言っておくけどあたし別に自炊が出来ないってわけじゃないんだからね！？ただあえてやってないっていうだけで……！」

その時閑がぼん、と両手を合わせて、言った。

「そうだ、いいこと思いつきました」——僕の空腹も満たせてナツキさんのためにもなる、良い方法があるのですけれどいかがですか？」

……ああ、もう。だからなんでこいつはこんなに意味もなくへらへらと笑えるのさ。

「……ねえ。あたしってば今なんで、こんなことしてるのかしら？」

「えー？いいじゃないですか、たまにはこういうのも？」

彼は一体何がそんなに楽しいんだろう、というくらいにこにこと上機嫌に笑っていた。あたしたちは今、街の中を並んで歩いていた。閑の両手には、ぱんぱんに詰まった買い物袋。そう。あたしたちは今しがた二人で近所のスーパーに買い物に行ってきたのだ。家に食材と呼べる食材がほとんど何もない事を知った閑は、あたしに買い物に行く事を提案した。もちろん買出しのための費用は全部あたし持ちだ。面白くない展開ではあったが、閑が『自分が食事を作る』と言ってきたので結局は折れることになったのだ。

「ったく……本当にあんた料理なんか作れるわけ？」

「ふっふっふ、任せてください！腕によりをかけて頑張っちゃいますよ～」

「……あれ。ナツキ、ちゃん？」

いきなり後ろから声をかけられて、振り向いた。目の前にいたのは——。

「やっぱり。ナツキちゃんだよね。久しぶりだね」

「ひ、平泉さんっ！？」

スーツ姿の爽やかな好青年。この人を表現するのにこれ以上の確な言葉はないだろう。

「やだ、本当に久しぶりですね！」

「巡さんの四十九日の法要以来だから、三ヶ月以上になるかな」

「はい、あの時はいろいろとお世話になって……何とお礼を言っていいか」

「……誰です？」

その時それまで黙って会話を聞いていた閑が横から口を挟んできた。ああ、もうこいつのことすっかり忘れてた！黙っておいてくれればいいのに！平泉さんも見慣れぬ閑の存在に困惑した表情を見せている。どうやら放っておくという訳にもいかなさそうだ。

「閑、こちらは父さんの知り合いだった平泉さん。若いのに画廊を経営されてて、あたしも小さい頃からよくお世話になってるのよ」

「へえ～」

「えっと、平泉さん、それでこっちは閑って言って……」

そこまで言ってあたしは言葉に詰まった。……ちょっと待って。一体あたしは彼のことを、どうやって説明すればいいんだろう？今日いきなり家に押しかけてきた変人です……だなんて正直なところを言ったとして……言えるかああっ！！

「あの、従兄なんです。遠くに住んでるんですけど、今ちょっと休みを利用して遊びに来てて」

「どうも、古鳥閑です」

閑はあたしの口からでまかせに、普通に話を合わせてくれている。

「へえ、それで二人で買い物に行ってきたのか。仲がいいね」

「ちょっと待ってください！あたし、別にこいつとはそんな関係じゃ…！」

「分かってるって。いやあ、若いって言うのはいいねえ」

……わ、分かってないじゃないですか！！

「だから、本当にそういうんじゃないかって…！」

「——それにしても、よかったよ。お母さんが亡くなって、唯一の肉親だったお父さんまであんな形で亡くされて。ナツキちゃん、すっかり落ち込んでるだろうなって思ってたんだけど。思ったより元気そうで良かったよ。……それもこれも彼のお陰、かな？」

「じょ、冗談きついですよっ！？」

「はは、それじゃあそのうちまた家にでも寄らせてもらうよ」

そして平泉さんはくるりと踵を返して、元来た道を歩いていった。その後ろ姿が見えなくなるまであたしは見送って、そしてふう、と安堵の息をつく。

「よかったあ……」

「——ナツキさんって、あーゆー男性がタイプなんですか？」

「なななっ、あんた何言ってるのよっ!？」

「……分かりやすいですね……」

「あの、平泉さんとは全然そーゆーんじゃなくって、あたしが小さい頃からお世話になってるからお兄さんみたいな感じで……ってあんた一体何言わせんのよ!？」

一人で慌てるあたしを、閑が微笑みながら見守っている。……だから、そんな顔であたしを見ないでよ、反則だから!

「だから、ね。父さんが亡くなった時もその後、あたしがすっごく落ち込んでた時も本当にいろいろお世話になって。上手くはいえないけど、恩人みたいな感じなんだ」

「まあ、確かに。良さそうな人ではありますね」

独り言のように呟く閑。直後に彼は『さあ、行きましょうか』と言ってあたしの前を歩き出す。一瞬見えた横顔は、眩しい夕陽に反射してその色がよく読み取れなかった。

「……おいひい」

『閑の特製ビーフカレー』は思いの外、いや予想をはるかに上回っておいしかった。

「よかった〜。ナツキさんの口に合って本当に良かったです」

テーブルを挟んだその向こう側で、あたしと同じくスプーンを口に運ぶ閑は、心底嬉しそうにそう言った。パステルピンクのエプロンがこれまたよく似合っている。彼が自分の荷物の中からこのエプロンはじめ鍋やフライパンや料理器具なんかをごそごと出すのを見たときは『お前は青い猫型ロボットか!？』と思わずつつこんだけれど。

「ちゃんと栄養のバランスも考えてあるんですよ?あの、ナツキさん。……ナツキさん?」

「あ、ごめん、聞いてなかった。ごめんね、ちょっと。父さんのこと思い出しちゃって」

それを聞いて閑が疑問符を顔に浮かべ、『どうして?』と首を捻った。

「さっきも言ったかもしれないけれど、根っからの仕事人間でね。料理はもちろん家事はほとんどやらなかった。けど本当に。本当にたまにだけど、こうして料理を作ってくれたのよ。メニューは決まってカレーだった。それしか作り方知らなかったのよね」

俯いて、視線をテーブルの上のカレーに落とす。

「……閑。一体、誰が父さんを殺したんだろう。何で父さんは死ななきゃならなかったんだろう。ねえ、何で?」

閑は、黙って目を伏せていた。

「——ごめん。こんなこと、あんたに言っても仕方なかったね」

あたしのそんな否定的な言葉に、閑は笑って首をゆったりと左右に振った。

「忘れませんか?約束は『絶対』、ですよ?あなたのお父様を殺害した犯人は、絶対に捕まえます」

「閑……」

「その、お父さんはどんな方でした?例えば、仕事上での人間関係とか」

「回りくどいのね、単刀直入に聞けばいいじゃない。父は誰かから恨まれてなかった?誰かに殺意を持たれるほど憎まれてはいなかった?って。聞きたいのはそういうことでしょ」

「……本当に、あなたという方は鋭くて参りますねえ」

「あたしが気分を悪くしないよう気を遣ったつもり？いいわよ、そんなこと気にしなくて」
そしてあたしは口元に手を当て、質問の答えを探した。

「特に恨まれてたとか、そういうのではないと思う。でも……」

「でも？」

「父って結構厳格で頑固な方でね。その上正義感が強くて……不正とか悪事とか、そういうのは見てみぬふりを出来ないような人間だったの。それに、最近何だか気になることを言ったのよ。周りでなんかよくないことをしてる人がいるらしい、みたいなの」

「よくないこと、とは？」

「さあ、あたしもよく分かんない。警察にも一応言ったんだけど、まともに取り合ってもらえなかった。警察の人たちは行きずりの強盗の仕業、って信じてるみたいだから」

それからあたしたちはしばらく長い間、事件についての話をずっとしていた。とはいってもあたしが閑に話せることはそんなになくて、ほとんどが父さんとの思い出話っぽいものになってしまっていたけれど。そうこうしているうちに、時間はあつという間に過ぎて夜はどんどん深まっていく。

「——やだ、もうこんな時間？そろそろ寝ないと明日学校なのよね」

「学校？ナツキさん、学生さんでしたか？」

「悪いけど、これでもピチピチの女子高生よ？」

あたしがそう言うと、閑が眉根を寄せ、ぼそりと呟いた。

「今時ピチピチなんて擬音……死語ですよ」

「うるさい細かいいちいち突っ込まない！それより、あたしの部屋以外だったらどこで寝てもらってもいいけど」

「ああ、いいですよリビングで充分です。ソファお借りしますね」

そう言って、閑は荷物の中からいろんなものを引っ張り出して就寝準備を始める。

……ってかよくよく考えたらあたしの部屋とリビング、襖一枚挟んで隣り合わせなんですけど？

「先に言っとくけど、少しでも変なことしようと思ったら張ったおすわよ？」

「ああ、それをご心配なく。一切そんな気ないですから」

そういう閑の満面の笑みに、あたしは思わずローキック。いやホントに思わずだから。

「なんで何もしてないのに張ったおされなきやいけないんですかねえ……」

「じゃあね、おやすみっ！」

ぼやく閑を無視し、あたしはリビングと自分の部屋の間の扉を閉めた。

「はい、おやすみなさい」

その向こうから、優しく穏やかな声が返ってくる。その晩布団に潜り込んだあたしがなかなか眠りに就けなかったのは、彼のせいだということにしておいていいんだろうか。

——目覚まし時計が朝の静寂を切り裂く。重い身体を引き摺り起こして、あたしは自分の部屋から出る。そして、次の瞬間。

「あ、おはようございます」

朝の光よりも眩しい笑顔がそこにあった。寝ぼけた頭には何が何だか分からなかった。

「……おはよう」

ようやく事情を理解して———というか思い出してそう挨拶を返すのに、結構な時間を要した。本当に、久しぶりだったから。朝起きて家の中に自分以外の誰かがいるっていうのも、『おはよう』って言葉がかけられるのも。

「台所、お借りしてますね～」

いつの間に起きたのか、閑はやっぱり昨夜と同じあのエプロンでやっぱり昨夜と同じく台所に向かっていた。上機嫌に実に楽しそうに、鼻歌交じりで。

「もうすぐできるんで、座って待っててもらえますか？」

返事をする代わりに、椅子を引いてそこに腰掛けることであたしはそれに応える。

そしてやがて食卓に運ばれてきたのは、こんがり焼かれたトーストとちょうどいい具合に焦がされたハムエッグ、そして野菜たっぷりのサラダ。なるほど。栄養満点、ね。

「じゃ、いただきます」

閑が席につくのと同時に、あたしはそう言って食べ始めた。ふと見ると、閑は自分の分には手をつけず、あたしの方をじっと窺っていた。ただ黙って、にこやかに笑って。

「……おいしいわよ」

あたしの簡潔な一言を聞いて、またも閑はにぱっと明るく笑った。

「そうそう、そういえばナツキさん今日学校って言ってましたよね？あの、これを……」

言いかけて、閑がある物を持ち出してきた。———そう、巾着袋に包まれた、あの箱を。

「もしかして……それ、弁当？」

「はいっ！」

元気のいい返事をもらって、あたしの苦惱はいや増した。軽くめまいが襲う。

「あの、差し出がましい真似でしたか？」

「……仕方ないわね。せっかくだからもらって行ってあげる」

「はい、行ってらっしゃい！」

———間違ってる。あらゆる意味で何かが間違ってる。見ず知らずの男を一晩家に泊めて、夕食まで作らせて、弁当まで作ってもらって、そしてその男に送り出してもらってる、だなんて。……でもそれは不思議と、随分長い間忘れていた心地よい感覚、だった。

閑の作った弁当は、仲間内でも大好評だった。『一体誰が作ったの？』という友人のその素朴な質問に、あたしはただ『ちょっと知り合いが』などと言葉を濁すばかりだった。そしてそれ以外は特に変わったこともなく一日が過ぎていった。そう、本当に何の変哲もない普通な一日ではあった。授業を終えてあたしが帰宅する、その間までは。

あたしが呼び鈴も鳴らさず自分で鍵を開けて帰ると、閑が部屋の奥———台所から飛び出してきた。エプロン姿で、スリッパをぱたぱたと鳴らしながら、手には料理道具なんか持ちちゃったりして。

「お帰りなさい、夕食にします？お風呂にします？それとも、ア・タ・———ぎゃうっ!？」

「そ、そこまでっ！」

最後まで聞くことに耐えられず、あたしは思わず持っていた鞆で閑を殴りつけて黙らせた。だから何度も言うけど、何かいろいろ間違ってるからっ！！

「あ。そういえば、家の中を掃除してたらこんな物見つけたんですけど」

「ってあんた、人のうちを勝手に！！」

「大丈夫ですって、巡さんの書斎をちょっと見せていただいただけですから。ナツキさんの部屋には指一本触れていませんよ」

「ホントのホントに？」

確認するように、あたしはそう問いかけた。

「ええ。そんな、年頃の女性の部屋に忍び込む、なんてそんな真似。まァナツキさんの部屋は散らかりすぎて年頃の女性の部屋かどうかさえ判別できない状態でしたが」

「——ってあんた、結局入ってるんじゃない！！」

「中には入っていませんよー。ちょっと覗いただけですって。……それはともかく、これなんですけど」

閑が見せたのは、写真立てだった。中には若い頃の父さんと他に男性が二人映っている。背が高く右手にパレットを持っている人と、背がやや低めで格好つけてベレー帽なんかかぶってしまっているもう一人。いかにも画家仲間、といった感じの写真だ。

「……この二人はあたしも知ってるわ。確か、深川さんと大垣さんって言ったかな？父の美大時代からの知人らしいわよ。昔はそれなりに親しかったらしいけど」

「昔は？今は違うんですか？」

「うん。二人も絵描きを目指してたらしいんだけど、父さんは売れてこの二人は芽が出なかったから。それで時が経つにつれ、段々ぎくしゃくしちゃったみたい」

「今、この方たちは？」

「あんまり……いい噂を聞かないわね。借金もあるらしくて、たまに父さんにもお金を借りに来てた。最初は父さんも援助してたけど、それがあまりにも度重なるから、ね」

「彼らが金銭目的で巡さんを手にかけた、という可能性はありえると思いますか？」

閑の質問に、あたしは応えて頷く。

「あたしも最初、この人たちを疑ったわ。でも考えてみたら、父さんを殺してもこの人たちには何一つ得はないのよ。金庫から奪われたのは、本当にわずかなお金だし」

「それでも人は、そのわずかの金銭のために犯罪を実行することも有り得ます。本当に生活に窮していたとしたら尚更です」

「……なんか、見てきたように言うのね？」

「はは、まさか。一般論って奴ですよ」

あたしの一言を、閑は笑ってはぐらかした。

「この二人に関する資料は、他にありませんか？」

「そうねえ。写真ならきつと、父さんのアトリエに行けばもっと見つかると思うわよ」

アトリエ。つまりは事件現場、だ。

「今からそこへ案内していただくことは出来ますか？」

「……できないって言ったらどうするのよ？」

天邪鬼なあたしがそう返すと。

「言いませんよ。ナツキさんにとってはとってもお優しい方ですから」

ああもうだから何でこいつはそういう事をいけしゃあしゃあと言っただけのけるんだらう。

「……はい、着いたわよ」

あたしはドアの鍵を開けた。アトリエ——とかいいつつ実はマンションの一室だったりするのだが。中には、広いフローリングの床が広がる。あたしが先に中に上がりこみ、その後に閑が続いてきて部屋の扉を閉める。

それから閑は手際よく部屋の中を調べていった。あたしは何をするでもなく、その様子を黙って眺めている。

「ナツキさん！ちょっといいですか？」

そうすると突然閑があたしを呼びつけた。

「これ、見覚えはありますか？」

そう言って閑が見せたのは、一箱の段ボールだった。横から中を覗き込むと、中には白い重量のありそうな物体が入れられている。

「……石膏像？何でこんなものが？」

そう。それは人間の頭部を象った、よく学校の美術室とかにある感じの石膏像だった。

「ナツキさんにも覚えがないんですね。だとしたらこれは、一体何なんでしょう？」

閑の疑問ももつともだ。だってあたしの父さんは画家であってけして彫刻家ではない。

「……それほど値打ちのある品にも見えませんが……よしよ、と」

そう言って、閑が箱の中から像を両手で持ち上げた。そこから一枚の紙がひらり、と地面に舞い落ちる。気になって、あたしはその紙を床から拾い上げた。白い紙に黒いペンで何か文字が書かれている。随分慌てた様子の走り書き、といった感じだけどあたしにはその文字を書いた主が瞬時に判別できた。これは、父さんの字だ。

「これは……一体、どういうこと？」

思わずそう、声に出してしまっていた。書かれていた内容が、あまりにも思いがけないものだったから。

『なんてことだ。私は知らないとはいえ、大変な犯罪に手を貸してしまっていた。ダメだ、これはこの世界に存在してはいけないものだ、直ちに闇に葬ってしまわなければ』

「なるほど。これを造ったのは芸術家などではなく忌まわしい犯罪者だった、というわけですか」

何やら意味深な言葉を呟くと、直後閑はとんでもない行動に出た。——持っていた石膏像をいきなり床に叩きつけたのだ。当然それは荒々しい音を鳴らして砕け散る。

「ちょっ、あんた、何すんのよ!？」

床に飛び散った破片—彼はしゃがみ込むとそこから白い粉を指に取り、口元へと運ぶ。

「やはり……これは」

「ああもう、ひとりで分かってないで説明してよ！一体、何なの!？」

「——麻薬ですね。それもおそらくはかなり上等の」

どうしてそんなことが分かるのかと聞くべきだったのかもしれないが、あたしの関心の的はそこじゃないのであえて無視することにする。

「麻薬？そんな、どういうこと!？」

「石膏に混ぜて偽装して、国内に持ち込んだんだ。犯罪者を賞賛するつもりはないが、方法としてはそれなりに有効なものです。このように石膏を割って溶かせば、再びまた分離させて純度の高い薬を精製することも可能ですしね。問題は……どうしてこれがこんな場所にあるのか、ですが……」

「そうよ、なんで父さんがこんなものを!？」

「おそらく巡さんは騙されたのでしょう。一時でよいからこの像を保管して欲しい、預かって欲しい、と。見た目は本当にただの石膏像でしたから。だけどもある日、何らかの拍子にそのカラクリに気が付いてしまった」

「じゃこの像を父さんに受け渡したその誰かが父さんを殺したってこと!？」

「断言することは出来ませんが、可能性としては看過できないと僕は考えます」

あたしは父さんの走り書きのメモに再び視線を移す。間違いない、これは確かに父さんの直筆だ。あの人は正義感が強かったから……真実に気が付いたとき、その罪を許すことができなかったんだ。

あたしは他にも何か手がかりがないかと箱の中を漁った。けれどそこには像と紙切れが一枚入れられていただけらしく、中は綺麗に空っぽだ。

そしてあたしは箱の外を調べた。それは宅急便で送られてきたらしく、運送会社の送り状が貼り付けられたままだ。けれど残念ながら、そこに書かれている送り主もその住所も、あたしには記憶にないものだった。この様子だと架空のものかもしれない——。諦めて、あたしが箱から手を離そうとしたその時だった。送り状のその奇妙な特徴に気が付いてしまったのは。……ペンのインクが、不自然に右に滲んでいる。……もしかして。あたしは犯人に繋がる重要な証拠を見つけてしまったのかもしれない。

「——閑、あのさ——」

その時あたしの携帯が突然鳴った。すぐに取り出して見て見るが、迷惑メールだった。消去して制服のポケットにしまおうとするが、その様子を閑が興味深そうに見ていた。

「どうしたの？」

「いえ。失礼ですが、随分渋い趣味をされているなあと思ひまして」

言われて、あたしは手に持ったケータイに視線を移す。なるほど。確かに一昔前の機種のそれは黒一色で、よく言えばシンプルしかし飾り気なんていうものは一切ない。

「当然よ。これ、父さんのなんだから」

「はい? どういう意味です？」

「だからこれ、もともと父さんの携帯電話なのよ。遺品……形見、ってことになるかな？」

なおも閑は不思議そうな表情で、あたしの顔とあたしが手に持つそれとを何度か交互に往復している。形見にするなら携帯電話以外にもいくらでも適したものがあるんじゃないのか? とでも言いたげな、困惑した瞳で。

「……仕方ないじゃない。気になって、手放せないの」

当然血は拭ったがべったりと染み付いたそれは簡単には取れなくて、今でもところどころ赤黒い箇所が残っている。それでも…あるいはだからこそ、あたしはこれを捨てることが出来なかった。だけども理由は、そんな精神的なものばかりではない。

「これ、父さんが死ぬ直前まで手にしてたらしいの。発見された当時、画面には意味不明の数字が残ってた。あたし、最初は父さんが何かを伝えようと思って残したんだ、って勝手に思ってた……」

「ちょっと見せていただいてもよろしいですか？」

頷いて、あたしは閑にケータイを渡す。

『5444222384446777755554444*77772*88777555514444』

——画面に表示されているのは、数字が並んだ奇妙なメッセージ。正直に言えば、これが意味を持ったメッセージかどうか分からないのだけれど。

「なるほど。ひょっとしたらひょっとして、ダイイングメッセージってやつですか」
それからしばらく閑は携帯を弄り回していた。おいおい他人の携帯だぞとかそろそろ返せや、とか思ったけれど彼のその様子があまりに真剣なので、声をかけられずにいた。

「……あの。巡さんって、松尾芭蕉は好きでした？俳句が趣味だった、とか？」
するといきなり視線だけは携帯の画面に落としたまま、閑はあたしに意図が見えない質問を投げかけてきた。

「変なこと聞くのね。別に、これといってそんなことはないわよ。まあ旅行も趣味のひとつだし、奥の細道の名所も随分訪ね歩いたとは聞いたことあるけど」

「そうですか。ありがとうございます、参考になりましたよ」
やがて彼は大きくため息をついて、ディスプレイを閉じた携帯をあたしに返した。
その顔に映るのは……戸惑い……？一瞬見間違いかと思ったけれど、彼は確かに、らしくなく困惑した、複雑な表情を見せている。

「閑？一体、どうしたの？」
問いかけるあたしの声も弱くなるとういうものだ。

「ナツキさん。僕らは犯人の尻尾どころか、前髪を捕まえてしまったのかもしれない」
「？どういう、こと？」

「事情は追々説明します。——それから、もう一つ。事件が解決したとしてもその謎が解けたとしても、あなたの心が晴れるかどうかは分かりません。それでもあなたは」

「——そんなの、決まってる！それでもあたしは真実を知りたいことを望むわ！上手く言えないけど、このままにしておくなんてそんなの絶対耐えられないものっ！」

「……そうですか。それなら、僕からはもう何も言うことはないですね」
そして閑は笑ってみせた。でもそれは今までの明るい笑顔とは違って、初めて見せる、無理をした表情だった。それが意味するものを、この時のあたしに理解できようはずもない。窓から吹き込んでくる冷たい隙間風が容赦なくあたしの背筋を凍えさせていった。

「……ねえ、閑。焦らす必要なんてないでしょ？」

「ダメですよ。こんな場所で……」

外に出てみると、いつの間にか夜はとっぴりと暮れていた。そうやってあたしが何度頼んでも、閑は首を縦に振ろうとはしてくれない。

「ねえ、お願いだから」

「だから、ダメです。……第一、やめましょうよこの会話、誤解を招きかねませんよ？」

「誰が誤解するっていうのよ？誰も聞いてないわよ？」

「誰かは『誰か』、ですよ。——とにかく今は、家に帰ることを優先しましょう。ね？」

閑はとりあえず、といった感じでまずあたしの家に帰ろうと言い出した。あたしはそんなことより真っ先に、閑の気付いたらしい事件の真相について聞きたかったんだけど。閑はやんわりと、それでも頑として語ろうとはしなかった。それは真実をあたしに告げることをおそれ、その時機を先延ばしにしているようにも思えた。あたしの邪推しすぎかもしれないけど……。

「ああもうやだ、また赤信号。——ここの信号長いのよねえ」

閑が家に着くまで話をする気がないのなら、せめて少しでも早く家に着きたいと思うのだが、何故か上手くいかない。お陰でこうして些細な事にさえイラついてしまうし。

「——あ……っ！」

「どうかしました、ナツキさん？」

その時私は、道の向こう側に見つけてしまった。行く？行かない？追う？追わない？それとも——。

……迷ってる時間はない。行こう、そして追おう！あたしはそう心に決めた。けれどもそうすると今あたしの隣でのんびりと信号待ちをしているこの男が、言い方は悪いけれど邪魔になってしまう。考えた末に、あたしは早口でこう切り出した。

「ごめん、閑。あたしちょっと大事な用があるの忘れてたのよ。先に帰っててくれる？」

「え？え、で、でも……僕もついて行きましょうか？」

「ダメ！いいから。早く帰って夕食準備しといてよね？今日も作ってくれるんでしょ？」

我ながら、ぎこちない笑顔だった。けれどもそれでも何とか閑を説得することができた。

「は、はい、分かりました。ですが、あの——」

「じゃあ、ごめんね！あたしもすぐ帰るから！！」

言いかけた閑の声を遮って、あたしは青信号になったばかりの横断歩道を走り始める。

「困ったな……。僕、独りで家に帰れるかなあ……？」

横断歩道を走り終えたその時、あたしは既に彼らの姿を見失っていた。けれど、歩いていった方向は分かる。着いて行けば、じきに見つけることが出来るだろう——。

「……と思ったんだけどなあ……」

進むにつれ、道は細く、暗くなっていった。裏路地というやつだ。まるでわざと人の居ない方、街並みから外れた薄暗い方を選んで歩いてきているみたい——。

「……………」

その時、不意に遠くからわずかにだけれど、足音が聞こえた。

「もしかして……のど——」

言いかけてあたしは、止まった。——違う、彼じゃない。足音が二人聞こえる。二つの足音は、

ひたひたと近付いてきた。誰？一体、誰が——。

「やあ、ナツキさん。こんなところで会うなんて偶然だねえ」

「深川さん？大垣さんも」

現われたのは、父さんの画家仲間——と呼ぶことが適当かどうかは分からないが——の二人だった。

「どうして、こんなところで？」

「いいじゃん、そんなこと。それよりもう一人の男はいないのかな？」

「……どうして……！」

どうして、こんなところに。どうして、あたしが今まで閑と一緒にいたことを知ってるのか。事情をすべて理解することは出来なかったが、ただあたしは彼らをつけているつもりで逆につけられていたということ——そしておそらくは、この暗く人の居ない場所にわざと誘い込まれたんだということだけは確からしかった。

「気付いてなかった？俺たち巡さんが死んでからずっと、君の行動を監視してたんだよ。君が普通に生活してくれてる分には全然問題無かったんだけどさ。……けどここ最近、昨日から君はよく知らないけど怪しい男を家に招き込んで、こうしてアトリエまで何かを探りに来たみたいじゃないか。悪いけど、放っておくわけにはいかないんだよね」

「何でそんなこと……」

「答えは簡単さ。君に探られると困ることがあってね。君が『何も見なかった』と言って黙ってくれれば一番いいんだけどさ。——今からでも遅くないよ。何も知らなかったことにして、おとなしく家に帰るつもりはないかい？」

やっぱり、この人たちが父さんを……？今の言葉で、あたしはいよいよ疑惑を深める。

——閑と一緒にアトリエを搜索して、あの段ボール箱を見つけて、ひとつ分かったことがある。それは箱に添えられた送り状のインクが、右方向に滲んでいたということ。犯人は一つ、大きなミスを犯していた。それは送り状を直筆で、それも利き手でボールペンで記入したことだ。右利きの人間が文字を書いてもあんな風にはならない。左利きの人間が右向きに文字を書こうとしなければ、ペンのインクが右に滲むことはないのだ。

そして今、あたしの目の前で悪意ある笑みを浮かべる男たちの片方——そう、確か深川、と言ったか。彼は父さんと写った写真の中で右手にパレットを持っていた。つまり左利き、だ。そして何より今、この状況。だったら尚更、ここで引き下がるわけには……！

「——聞けません！」

あたしははっきりと、そう力を込めて言い切った。

「それじゃあ仕方ないな。娘さん、後悔するなよ。そして恨まないでくれ」

背の高い方、深川がポケットに左手を突っ込むと、そこから小型のナイフを取り出した。鋭利な刃先が月光に鈍く光る。そして大垣ともども、徐々に距離を縮めてくる。考えるよりも先に足が動いていた。今のあたしにはとりあえずこの場から逃げ出すことしか、方法が思いつかなかった。当然、二人は後から追ってきた。振り返って確認するまでも無く、足音は確実にあたしを追い詰めてくる。っていうか振り返ったら負けだ！後ろを振り向くな、前を向いて走れ！！

「……………」

胸が、苦しい。息が上がってくる。涼しさを通り越して冷たく冷えた宵の空気は、肺を灼くかのように傷めつける。それでも夜の闇を必死に駆け続けるあたしの目に映ったのは、絶望という名の二文字だった。道が、ない。道路の先が完全に壁で塞がれている。袋小路という奴だ。迷っているうちに、騒々しい足音があたしの背後で緩まった。

——そして、今来た道に戻るといっても出来ない。ええい、こうなったら一か八かっ！

「……ごめんなさい、分かりました。あたしもう、抵抗しませんから。煮るなり焼くなり、お好きになさってください」

「何だ？いきなり観念したか？」

男が持っていたナイフを収める。

「まあ正直言えば俺たちは、君がこれ以上余計な詮索をしなければ、それで構わないんだけどよ——」

今だ、チャンス！そのままあたしは男に向かってタックル。突然のその行動に相手はなにも出来ず、されるがままに地面に転がる。その隙にあたしは男からナイフを奪い取った。けれど。

「大垣、押さえろっ！」

「きゃっ!？」

いきなり後ろから羽交い絞めにされてしまう。そうだ。もう一人の存在を忘れていた。

「ったく…油断した」

男が起き上がって近付いてきて、あたしの顔に触れる——顎を引き上げて、顔を近づけた。

「……その瞳。気にいらぬね…あの偉そうな大画家様にそっくりだ」

……がぶり。あたしは躊躇無く、その指を思いっきり噛む。

「よくも、よくも父さんを……許さないっ！——っ!？」

——瞬間、頬から頭にかけて、衝撃が突き抜けた。それが目の前の男に平手打ちをされたせいだ、ということを理解するのに結構な時間がかかった。そして同時にその瞬間に、手にしていたナイフを地面に落としてしまう。先程からずっと両手を後ろから男に捕まれたままでは、拾い上げることも叶わない。深川が凶器をゆっくりと再び手にする。

「……やれるなら、やってみなさいよ。あたし、ちっとも怖くなんかないからっ！」

「やれやれ、とんだじゃじゃ馬もいたもんだ。また噛み付かれでもしたらたまらないからな——」

そう言って、深川はあたしの斜め後ろに回りこんだ。なるほど、確かに正面を避けられたらあたしは手を出すことができない。そうこうしているうちに、首筋に冷たい感触が走った。——深川のナイフが突きつけられているのだ。ひんやりとした、無機質な感触。反射的にあたしは身を縮こまらせた。これがあとほんの少し動かされただけで、あたしの命はないんだろう。……どうする、どうする!？

「のど……っ」

声に、ならない。声帯を震わせたその瞬間にその刃が喉元に食い込みそうで、あたしは情けなく唇をわずかに動かすことしか出来なかった。——いやだ——死にたく、ない……！

「ぐっ……」

「え……っ?」

くぐもった悲鳴とともに、`何か、が地面に倒れる音がした。同時に、金属がコンクリートに投げ出される高い音。おそろおそろ目を開けてみると、そこにはうつ伏せに地に倒れ伏せる深川の姿があった。

次の瞬間、またも同じような低い呻き声が聞こえる。それと同じくして、今度はあたしを縛り付けていた手が外れた。予期せず解放されて自由になった身体に、あたしは足に力が入らずそのまま地面にぺたんとして座り込む。首だけを動かして後ろを見てみると、そこには今度は仰向けに倒れる大垣の姿。……どうやら二人とも、気絶しているらしかった。

「——やあ、危ないところだったねナツキちゃん」

聞こえてきたのは、いつだって聞き慣れた声のはずだった。それなのに、その声の主がすぐに分からなかったのはその人がこんな場所にいるはずがない人物だったから、だ。

「平泉、さん？あの……どうして、ここに？」

優先順位をつけるなら、まず真っ先にそれを尋ねるべきだろう。何故、こんな時間に、こんな場所で。——偶然、なんかじゃない。それは必然と呼ばれてしかるべきだ。

「街で偶然、あの閑とかいう男の子と一緒に歩いてる君を見つけてさ。見てたら、どんどん人気のない場所に入っていきものだから。心配してっていうより、ちょっと気になってね。ここまでついてきたんだ。そうしたら君がこいつらに襲われているだろう？これは何とかしなきゃと思っ

って」

「そう、なんですか……」
——優しい、平泉さんの笑顔。それを見て安心することができたなら、あたしはなんて幸せだったろうか。

「……ひとつ、聞いてもいいですか？」

あたしは地面に座り込んだまま、顔を伏せて視線を合わせないようにして切り出した。

「なんで知ってるんですか？あたしがさっきまで閑と一緒にいた、って。そんな、ずっと『見ていた』みたいな言い方……それに考えてみれば、いくらなんでもタイミングが良すぎます。まるで計って現われたかのような——」

聞きたくない。けれど、聞かずにはいられない。そしてあたしは、聞くことを選んだ。

「……お願いします、平泉さん。教えてください。一体あなたは どうして——本当のところはどうなんですか……！？」

「——計って現われたかのような、じゃなくて実際に凶ってたんだよ」

「平泉さん！？」

「やれやれ、困ったな。まさか君がこんなに鋭いなんて計算違いだ。お父上の件は、不幸な事故だったんだ。——時が経てば、やがて諦めてくれるだろうと思っていたが…さすがにそれは虫が良すぎたか」

「……一体……何が、どうなって……」

「君はひとつ、大きな誤解をしていたみたいだね」

それは今まで聞いた事もないような、冷たく凍った声だった。

「この深川と大垣が『警察に知られたら困るような』罪を犯していたことは事実さ。けれど、それが巡さんの死と必ずしも因果関係があるとは限らない」

「……どういうこと……？」

「彼らが手を染めていた犯罪は、『麻薬密売』——つまり石膏像に偽装したそれを巡さんを騙して保管させていたのは、彼らだったんだ。どうにも、警察の手入れが入りそうだとということで慌てて証拠物件を隠そうとしたみたいだね」

「そんな……」

「君は、こうは考えなかったのか？その密売と殺人とは、全く関係のない事件なんだと」

「じゃあ、この二人は」

あたしは道に転がる二人の男を交互に見遣った。……そうだ。彼らは自分たちの罪をはっきり自白してはいない。

「そう。この二人は巡さんの殺人事件に関しては、何一つ関係してはいやしない」

「じゃあ、一体誰なんです！？父さんを殺したのは、一体——」

——違う、と思った。頭の中で、声が聞こえる。——違うだろう？お前が先に問うべきなのはそ

れではないだろう？あたしは、こう聞くべきなんだ——なんで.....

「なんで平泉さん、なんであなたがそんなことを知っているんですかっ!？」

——冷静に考えれば、簡単に答えが出てくる質問のはずだった。だけど、あたしは自分の出した答えを信じる事が出来なかった。いや、信じる事が出来ない、というよりは信じたくない、と言った方が正しかった。

「君には知る必要のないことだ。どうか、何も知らぬまままいってほしい」

ゆっくりとした動作で、平泉さんが地面に片膝をつく。そして、その両手をあたしの首筋に回す。——あたしには、抗えなかった。その気になれば逃げ出す事は容易かったのかもしれないが、あたしには出来なかった。認めたく、なかった。——そう、現実を。

「ひら、いずみさ.....」

彼の両手が、少しずつあたしの首を締め上げていく。

息が、苦しい。でもさっき夜道を走ったときのような胸を締め付けられるみたいな苦しさはない。静かに、徐々に意識が遠くなって行って、視界や音なんかの感覚が、どんどん外に消えていく。あたし.....死ぬのかな.....？先程までと違っていやに死に対して受動的な自分に、不思議なほど抵抗はなかった。ただ、胸が、心臓が、心の奥がじりじりと痛んだ。それがどんな理由から、どんな思いから来るものかはあたしには分かりようはなかった。けれどその`痛み、に呼応するように、目の奥が熱くなっていく。歪んでいく景色は遠ざかりゆく意識のせい、滲む瞳のせい、それともあたしの心の持ちようか。それ以上見ていることに耐えられなくなって、あたしは瞳を閉じた。溢れ出した涙が頬を伝って、首筋を濡らしていく。——そしておそらく、彼の罪深きその手を。

『——.....さん』

意識の外の、そのはるか遠くから。呼びかける声が、聞こえた。ろくに聞き取れないのに、それが自分の名前を呼んでいる、ということだけは何故かはっきりと確信できた。

「.....さん、ナツキさんっ!!」

その声はどんどん近付いてきて、ついにその姿が見て取れるほど近くまでやってきた。

「——誰だ？」

思わぬ乱入者に、平泉さんがあたしから手を離す。自分の身体を支えることすらできずにそのまま地面にくず折れたあたしは、信じられないほど咳き込んだ。——けれど、そのお陰であたしは実感できた。自分が今、生きているということ。

「ナツキさん、大丈夫ですか!？」

優しい手のひらが、あたしの背中をさすってくれた。何度も——何度も繰り返して。

「ん.....だいじょう、ぶ」

目の前に差し出されたもう片方の手を、縋るように握り締める。見上げた閑の顔を見ただけで、彼がどれだけあたしのことを心配してくれていたかことが分かった。

——悪かったな、こんなに心配、かけちゃって.....。あとでちゃんと、謝らないと——。

「邪魔をするなっ!」

安堵する間もなく、地面に落ちていたナイフを拾い上げると、平泉さんが叫びながら切りかかってきた。あたしの目の前で、鮮血が散る。——視界に映るのは、腕に深々と刃を突き立てられた閑の姿。

「閑っ!？」

思わず名前を呼ぶあたしに向かって、彼は有り得ないくらいの笑顔を作ってみせる。

「大丈夫ですよ。心配しないで」

不意に、閑は真剣な顔で平泉さんに向き合うとそれに見合った声で静かに問いかける。

「これ以上、罪を重ねるおつもりですか？」

「その口ぶりだと、君はもう既に気が付いているようだな」

「ええ、まあ。ある程度のことは予想はついています」

閑は地面に座り込み、腕の中にあたしを抱え込んだままの姿勢で平泉さんと対峙した。

「——改めて問います。池村巡氏を殺害した犯人は、あなたですね？」

「.....理由を聞いてもいいか？」

「分かりました。決め手は被害者の携帯電話に残されていたメッセージでした」

閑は失礼します、と言ってあたしの制服のポケットから携帯電話を取り出す。

「見てください。『5444222384446777775555544444*777772*88777755555144444』一見すると何がなんだか分かりませんが、これは巡氏が今際の際に残したれっきとしたダイニングメッセージなんです。簡単な暗号ですよ。そしてこのメッセージは、『携帯電話に残されていた』ということ自体に意味がある」

パチン、と携帯のディスプレイを開ける音がする。

「携帯の操作ボタンっていうのは普通、数字とアルファベット、それに『あ・い・う・え・お』の五十音に対応していますよね？普通にひらがなを入力できる状態にして、操作ボタンの数字を指示された回数だけ押していくんです。まず『5』ですがこれはあかさたなの『な』に当たる。5を一回押せば『な』が表示される、つまり最初の文字は『な』です」

その後も、閑はまったく同じ調子で説明を続けた。

「次は『4』を三回ですね。つまりた行の三番目、ということになります。すなわち、『つ』です。その後も『2』が三回連続している...か行の三番目、『く』ですね。以下、あとも同じ要領で続けます。『3』が一回で『さ』、『8』も一回で『や』。ちなみに補足をしておきますと、途中現われる*は濁点をつける、という記号ですね。さて、それでは現われる文字は——」

「『なつくさや・つはものどもが・ゆめのあと』か。最初さえ分かればあとは解かずとも読み取れるな」

「そうですね。『夏草や兵どもが夢の跡』——松尾芭蕉の有名な俳句です。要約すると意味は、『かつての先人たちが栄華を誇ったこの場所も今では草が生い茂り、見る影もない。まさしく人生とは夢のようなもの、人間とはかくもはかないものなのか』——といったような感じですかね」

聞きながらあたしは、ぼんやりと思った。ああ、だから閑はあの時父さんが俳句に詳しいか、と聞いたのか。

「そして最も重要なのは、この句が作られた場所です。芭蕉の晩年、『奥の細道』の旅程の中でこの句に織り込まれたその情景とは——そう、東北の平泉。そういうわけで、この暗号文は平泉さん、あなたのことを差していたという訳だ」

「その話、警察にはもう言ったのか？」

「いいえ、まだです」

「.....ということは、ここで私が『目撃者たち』を消してしまえば、事件の真相は永遠に闇の中、というわけだ」

「ええ、そういうことになりますね」

言葉とともに再び血に濡れたナイフを手にする平泉さんに、閑は抑揚のない声でそう答えた。

「あなたがそういう形での決着をお望みになるのなら、それもいいでしょう。ですが、せめてその前にお聞かせ願えませんか？せめて、あなたがその手で池村巡氏を殺害しなければならなかつ

たその理由を聞かせてはいただけませんか？」

——それはあたしも、心の底から質したい問題だった。こんな状況になっても、あたしは平泉さんのことを犯罪者だとは思えなかった。彼のあたしに対する態度は本当に優しくかったし、父さんとのそれだってけして陰悪なものではなかったはずだ。

「簡単な話だよ。金が欲しかったんだ。経営している画廊が経営難なんだよ。気が付けば、多額の借金で首が回らなくなっていた。それこそ、自分が首を吊らなければ返せないほどにね。そして私は、巡さんに援助を頼み込んだ。だが……」

「巡さんが、それを断ったんですね」

平泉さんが頷くのにあわせて、影がわずかにゆらめいた。

「あの人に拒まれたら、私はもう死ぬしかなかったんだ。分かっている、あの人を恨むだなんてお門違いだということも全部。けれど……私はそれに裏切られたらもう生きていけない、という最後の砦に見放されたんだ。私にはもう他にどうしようもなかった」

「——同情します。だから、という訳ではありませんがお願いです、潔く警察に自首してはいただけませんか」

「すまないがそれは聞けない」

「仕方ないですね。本意ではありませんが、こうなれば実力行使も止むを得ない」

意外にも、閑はあっさりと言得を諦めた。——分かっているんだろう、言って何とかなるような問題ではないと。なぜならこの人はもう、すでに引き返せない所まで来ているんだ。

「実力行使？何を言っている？」

平泉さんの疑問も当然だった。凶器を手にした相手に、閑は正真正銘の丸腰。おまけに右腕からは今も血が滴り落ち続ける。怪我の程度は分からないけれど、閑には不利な状況だ。すると突然閑は下がっていき、と言いついてあたしの前に入る。

——勝負は一瞬だった。平泉さんが刃を振り上げた瞬間、その一瞬の際に閑が即座に間合いを詰め、懐に入る。動かない右手の代わりに左で素早く相手の襟を掴むと、そのまま背後に回りこんで締め上げた。同時に足を払って平泉さんの体勢を崩し、地面にうつ伏せに倒れさせるとその上に体重を乗せて、組み伏せるような形で両手とも自由を奪う。

聞き苦しい、嫌な音が二三度響いた。……ややあって、閑が手を離して立ち上がる。それでも平泉さんは動かなかった。いや、動けなかった。

「すみませんが、腕と肩の関節を外さしてもらいました。しばらくそのままで我慢してください」

そして閑は踵を返して、後ろ——あたしのいる方を振り返った。先程からずっと身体に力が入らず情けなく地面に転がったままでいたあたしは、彼の顔を見上げた。けど、それは逆光になって表情はほとんど分からなかった。

「『つはものどもが夢の跡』——被害者はおそらくこう言いたかったのではないですか？どれだけ逃げおおせてもあなたはその罪から逃れられやしない。一生、それらの罪を背負い重い枷にして生きていかねばならないのだと。どんな罪も、いつかは必ず白日の下に晒される運命にあるのだと」

「閑……」

「あなたは間違いを犯した。それも簡単には償えず、あがなうことの出来ない罪を。これから残りの人生あとどれだけあるかは分かりませんが、あなたもその生涯すべてを罪を背負って先の見えぬ暗闇を彷徨う贖罪の為の旅に費やすがいいでしょう。——長い、長い旅路になるでしょうけどね」

相変わらず、表情は見えなかった。

「……一体君は、何なんだ……？」

平泉さんのその問いに、閑が不敵な笑みを寄せた——気がした。

「そうですね。きっとただのしがない旅人、ってやつですよ」

きっと彼は今、笑っているんじゃないかと思う。特に理由はないけれど、何故かそう思えた。その声はあたしがここ一日二日で聞き慣れた、飄々とした掴みどころのないものだったから。

そうしているうちに、ふと遠くの方から風に乗ってパトカーのサイレンが響いてきた。それは徐々に大きく、近くなってくる。初めて間近で見るパトカーも警察官も、夢の中の出来事のように現実味はなかった。それはひどく出来の悪いドラマの結末を見ているかのようで、呆気ないほど簡単に、警察は犯罪者たちを捕まえて行った。赤い警告灯も鳴らされるサイレンも、すべてが、闇の中に消えていく。

——ああ、これで、終わったんだな——思った途端に、胸の中にしまわれていた沢山の感情が一気に溢れ出していく。

彼の前で泣くのは腹立たしかったけれど、堰を切ったようにとめどなく流れる涙を、想いを止めることは出来ない。目を閉じて、止まらない嗚咽に身体を任せる。優しい手が再び、あたしの髪を撫でたような気がした。幼い子供のようにかっこ悪く泣きじゃくるあたしを、それでも奴は何も言わず、ただじっと面倒を見てくれた。

——どれだけの時間そうしていたかは分からない。一通り泣き終えたあたしはほっと気が緩んだのか、それ以上意識を保っていることができなかった。

——最後に覚えているのは、あたしを冷たいコンクリートの地面から抱え挙げた、彼の腕の温かさと、そのたくましさ——。

目を覚ましたとき、そこは見慣れた、自分の部屋だった。ただひとつ違ったのは、そこに彼の姿がある、ということ。

「おはようございます」

彼はあたしの部屋の中で、ベッドの横でくつろいでいた。

「……あなた、女性の部屋にはむやみに入らないんじゃないの？」

「時と場合によりけり、ですよ」

あたしのそんな嫌味も、彼は笑顔で受け流す。

ベッドに上半身だけ起こして、あたしは周囲を窺った。時計を見るとまだ朝方だった。部屋の中も薄暗い。閑は黙って荷造りをしている。不意に訪れた沈黙に、あたしはどう対処してよいのか分からない。あたしが戸惑っていると閑が優しい声で切り出してくる。

「ナツキさん、お腹空いたでしょう？実は朝食用意してあるんです。いかがですか？」

「ん。後で貰う」

ふと、あたしの視線が閑の右腕に止まる。——腕に巻かれた、痛々しい包帯。それは、あたしみたいな人間の胸を痛ませるのにも十分な役割を果たす。

「……ごめんね」

「はい？」

「その腕の、傷。あたしが……あたしが勝手なことをしたせいで、あんなことに……」

「どうしたんですか、いきなり？今日は雨でも降りますかね」

「……ちょっと。こっちは真剣な話してるんだけど？」

「いいじゃないですか。そうやって、ちょっと不機嫌そうにしているくらいがちょうどいいですよー？」

そうやって、また憎めない顔で笑う。……ちょっと気に入らないけど、彼のさりげない優しさは充分伝わった。怪我のこともあたしがバカやったことも、全部気にしないでいい、と言ってくれているのだ。だからあたしも余計な気を遣うことなく、自分の思うことを素直に言葉にする。

「なんでなんだろうね。なんで、平泉さんはこんなこと」

動機は彼の口から、彼の言葉で聞いた。だけどそれでもあたしには、現実を受け入れることはなかなか難しかった。

「今となっちゃ昔の話だけど、あの人本当にあたしに優しくしてくれたんだよ？それに本当に父さんの事を慕ってた。それがなんでこんなことに。父さんだってなんで援助を断ったんだろう？分かってたはずなのに、断ればあの人には後がないんだ、って」

「これは僕の考えですが、巡さんもあなたという家族を養わねばならぬ身です。それを考えれば、おいそれと借金の保証人になることはできなかったのではないのでしょうか。巡さんも巡さんなりに考え抜いた末の、苦渋の決断だったでしょう」

「そっか。なんかいろいろ、辛いね」

父さんも平泉さんも、それぞれ自分なりに一生懸命考えて、悩み抜いた結果だったんだ。もちろん、だからといって平泉さんのやったことを正当化しちゃいけないのは分かってるけど。ただ今はとにかく、胸が痛い。少しでも何かが違っていたら、止められた事件だったんじゃないか、なんて思ってしまうと、さらに。

「ちょっと、こちらへ来ていただけませんか？」

しばらくあたしが黙って俯いていると、閑がおどけた調子でそう声をかけてきた。

言われるがままに、ベッドから床に降りて窓の外——ベランダへと出る。——瞬間、目に映る景

色の美しさに、目を見張った。

窓の外に見えていたのは、朝が近づき、徐々に明るくなる空に押されるように、控え目に輝く青白い満月、だった。こんな街の中でも、月は綺麗だ。

「——いい眺めですね。ね、『名月』さん？」

答える代わりに、あたしはふと浮かんだ疑問を彼に問いかけることにした。

「ねえ、旅って楽しい？」

「ええ、とって」

「どんなところが？辛くはない？辞めたい、とか思ったことはないの？」

「そうですね……きっとプラスとマイナス、両方あるからおもしろいんですよ。旅をしなきゃ分からないことって案外沢山あって、旅をして初めて分かることは本当に多くって。北から南へ、西から東へ、各地を渡り歩いて。悪く、ないですよ。そういう人生も。……まあ、人にはあんまりお勧めできないですけどね」

そうして彼は微笑んだ。その顔に、その瞳に、様々な感情を映し出すように。

「いるべき場所があるのなら、必要としてくれるところや甘えられる場所があるのならそこに生き続けるのが自分のためにも他人のためにもいいんですから、本当は」

「ねえ、本当に行っちゃうの？」

ベランダの手すりにもたれながら、あたしは閑に質問を重ねる。

「ええ、そういう`約束、ですから」

彼が言う約束があたしとのものなのか、それともまた別の第三者と交わされた約束なのか。気になったけれど、そこはあえて聞かずにおいた。聞いてもきっと、上手くはぐらかされるのがオチだろうから。

「ねえ、もしかしてあたしの家を選んだのは、偶然じゃなくて狙ってやったことなの？」

「そ、そんなこと……」

即座に閑は否定しようとするが、明らかに狼狽して慌てている様子が現われてしまっている。

「実はね、ずっと気にかかっていたのよ。最初、あたしが『父さんが絵を描いていた』って言ったとき、あんた迷いもせず『画家』だって即答したでしょ？」

「ええ。でも、それがどうかしましたか？」

「それって、よくよく考えたら不自然かもって思ったの。絵を描く仕事っていってもデザイナーとかイラストレーターとか漫画家とか、他にもいっぱいあるわけじゃない？その中から自信を持って画家を選び取ったってことは」

あたしは閑の表情を窺った。……分かりやすい。笑顔が消えて、冷や汗をたらたらという擬音語つきで流している。

「あんた、本当は最初っから分かってたんでしょ？あたしの父親が殺人事件の被害者で、あたしがその娘だって。最初から分かってて会いに来たんじゃないの？違う？」

「……困りましたねー……。それは企業秘密、ということで勘弁していただだけませんか？」

「だめ。ちゃんと答えて」

その返答に、彼はため息をついてもう一度困りましたね、と口にする。

「そうですね……。どんなケースであれ、そして多かれ少なかれ違いはあれど、『事件』というのは『悲しみ』を生む。だから僕は、それを少しでも失くすために旅をしている。今言えるのは、これくらいですかね」

「……よく分かんない……」

「ううん、困りましたねえ」

「でも、いいや。よく分かんないけど、でもちょっとだけ分かったような気がする」

「どっちですか」

そして、二人は口を閉ざした。けれどそれは間違っても静寂が痛いような空間ではなくて、むしろ沈黙が心地よかったくらいだった。

「さあ。それでは朝ごはんでもいかがですか？」

その静寂に溶け込むかのような穏やかな声に、あたしは今だけ素直に頷いた。

そしてあたしは近くの駅まで閑を送ることにした。家の前で別れてもよかったのだけれど、少しだけでも彼との別れを惜しんだ結果だ。空は曇り、時折小雨がぱらつく。気まぐれな秋の天気を思い知らされた。それでも閑が表情を曇らせることはなかった。

『旅人とわが名呼ばれん初時雨』、ですか。それも悪くないですね——なんて、呑気なこと言っ
て。……あたしの記憶が正しければそれは冬の季語だった気がするんですけど。

あたしが見送るためについていけたのは、駅のホームが限界だった。タイミングがいいのか悪いのか、ちょうど電車が入って来て、閑は一人それに乗り込む。

とうとう、お別れだ。何を言えばいいのかわからないけれど……でも、言いたいことはちゃんと伝えておかないと。

「閑……なんか、その、いろいろ——」

「大丈夫ですよ。あなたならまたすぐに、新しい恋を見つけられますって」

言いかけたあたしに、相変わらず憎たらっしいくらい満面の笑顔で彼はそう言った。言ってしまった。人の気も知らないで！

「——バカっ！！」

叫びながら、あたしは荷物で両手がふさがった閑の顔に往復ビンタ。ホームに響いた数回の甲高い音に、周囲の客が好奇の視線を向けてくる。

「励ましたつもりなのに……なんで怒られなきゃいけないんですかねえ」

「ああもう、行くなら早く行っちゃえば！？厄介な居候がいなくなってせいせいするわ！」

「そうですね。本当に、お世話になりました」

……本当に。こいつってばバカだ。そんなの、こっちのセリフじゃ——。

発車を知らせるベルが、あたしの思考を途切れさせる。はっと上を向くと、自動ドアがあたしと彼の間を遮っていくところだった。

笑顔で手を振る閑に向かって、あたしはバカ、ともう一度小声で呟いた。聞こえたかどうかは分からないけれど。その瞬間、彼が唇をふっと緩ませたのが——見えたような気がした。

「あ～あ。今日はもう、学校サボっちゃおうかなあ～」

独り言を唱えつつ、あたしは両手を天へと向かって突き上げて、大きく背伸びをする。見上げた空は、やっぱり不機嫌なままだった。あいにく空は曇り空、時折雨もちらつく晴れない天気だけれど。でも、あたしの心は快晴の青空とまではいかないけれどそこそこ澄み渡って、自分でも信じられないほど穏やかな気分だった。

彼も今頃、この空を見上げているだろうか——？伝えたい言葉は、ただ二つだけ。それ以上は、旅の荷物には重すぎるだろうから。薄墨色の空に向かって投げかけた言葉は、静かに融けていく

ように消えていく。季節の替わりを知らせる風の色の中に、その返事を聞いたような気がした。